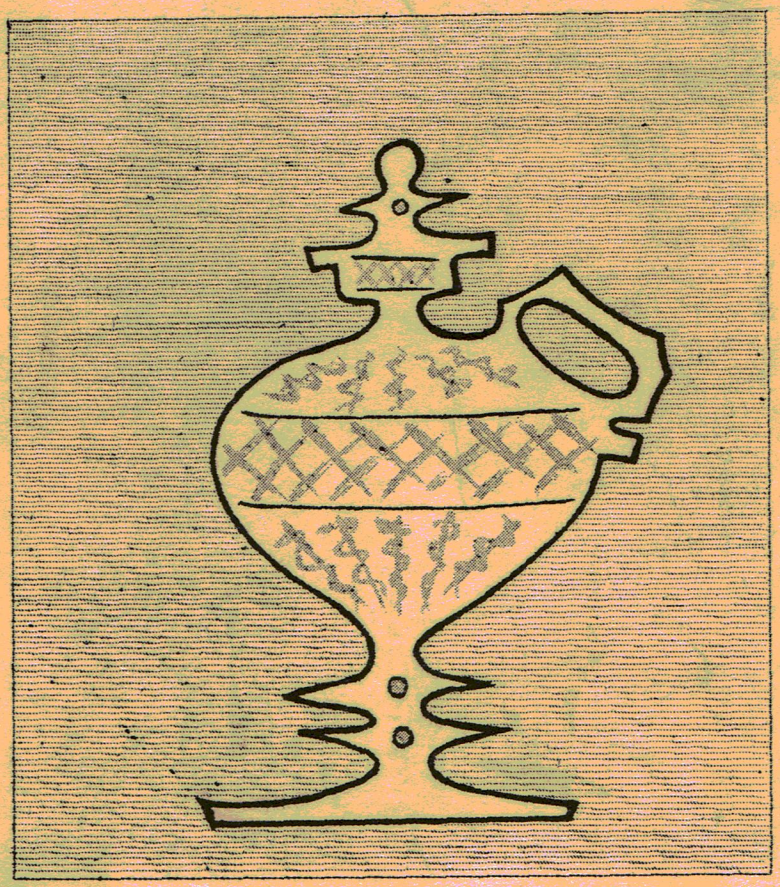
CHAIN

No.13



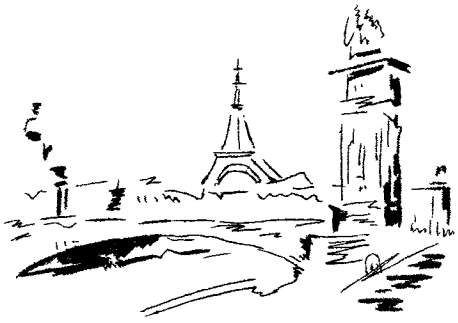
An Organ of Fib. Chem. Dept. Sep. '62

現在がための過去

現在がための未来

精一杯生きて行く現在

一歩一歩の確かさ



目次

落ちていた秋	4回生	原　　隼	2
新しい道、古い道		相宅　信吾	3
パルプ工場から	3回生	金井　政洋	5
「6.21の斗争に反対して----」を読んで	2回生	鈴木　紘次	11
長柄橋	1回生	岡本　　進	12
報らされることを拒否する権利		内藤　謙一	14
1回生コーナー			15
実習記	3回生	有松　利雄	20
断　章	3回生	井垣　有富	24
会　話	3回生	五十歩百歩	28
近況報文	4回生	原　　隼	29
夏季実習始末記	3回生	根岸　靖雄	31
なかにわ			32
矛　盾	4回生	寺田　英一	33
放　言	3回生	根岸　靖雄	37
思想，随想，幻想	3回生	金田　洋二	38
ポケット知識			23，28
編集後記			43

落ちていた秋

四回生　原　隼

秋は私を一人ぼっちにする，
　それは私の周囲を枯渇させる冬の　厳しい孤独ではない。
　　ふと蜻蛉病者を誘い出すような
　　もっと不安に淋しい孤独だ。

深い山合いの淀みに　浮いていた落葉がスーッと沈んで
　　その小さな波紋に　ふと石を投げてみたくなった。
　たわいない悲劇の構想が、そこから円運動を始めて拡がっていった。

白月の反にいぶされた長いレールの上を
　　平行線がいつか一点に消える期待をもつように
　途方もなく「秋の心」にとりつかれて歩き続けた。

裏街に三々五々のシルエットが　ほっと肩を落して動かない時
　　屋台のちょうちんにふと母の温みを覚えて
　　一層自分が不安になる。

月よ、虫よ、尾花よ ------　と三文詩人が弱々しく嘆じた。
　　その詩の尽き果てた所に「秋の心」が隠れている。
　不安か、むなしさか、
そこから青年の忘我の躍動が始まる。

秋はやってはこない。静寂にふと立ち止まる所に
　　秋は　落ちている季節　なのだ。

新しい道、古い道

相宅省吾

夏休みも終りに近づき体の調子も狂い始めて来た頃四日市の石油化学工場からの招待を受けた。

その工場は、我が国では川崎の石油化学センターと並んで一大コンビナートを形成しており、我が国産業の原動力となろうとしている所である。

会社の指定通り京都より草津線廻りの昔なつかしい汽車で美しい木津川の渓流をながめ、古ぼけた亀山の駅で乗りかえしばらくすると忽然と白銀に輝く塔の林立する四日市の駅についた。石油というのは不思議なものだ。アラビアンナイトではあるまいが、アラジンの不思議なランプの如く、砂漠の上に否日本では田の中に、海の中に不夜城が出現するのだから。その様な空想は直ちに破られ、紫葉服を着た顔見知の若い技術者に迎えられ、映画で見る西部さながらの道を通り、石油化学工場の中心に連れ込まれた。来る道々の左手には国策会社の合成ゴムの工場から五万トンの生産を昼夜を分たず続けており更に需要を満す数2～3万トンの一系列を加えようとしている。右手には今試運転の終ったばかりのポリプロピレンの工場がそそり立っていた。100万坪に近い敷地の中には、かつては帝国海軍の燃料廠の面影はなく、静寂の中に力強い石油精製、高圧法ポリエチレンの生産（5万トン）更に無数の石油化学製品の生産が続けられている。研究室で技術者達とポリオレフィンについて語り合った。幹部の人達の中には十何年振りに会ったかつての同僚も居た。しかし大部分は平均年令23才という若い人達で此の大工場を動かしているのであった。工場の敷地は元は沼であった。近くの岡から土を運び海面を埋め、沼を埋め、消えた岡には社宅や寮が立ち並び、その屋上から見える港には10万トン級のタンカーが油を満載して美しい航跡を引いて入ってくる。新しい道、新しい道、日本民族の生きんとするエネルギーが此の道を突進んでいる様な気がする。しかし悲しい事には此の道を開いた技術は西欧のものであって、我が国のものは何一つない事は、やむを得ないといいながら一抹の淋しさをおぼえた。夜は若い技術者達と話し合った。此の人達の育つ頃我が国の技術も一段と進むであろう。庭に出ると各工場の上には赤い火はもえ、蒸溜塔を照らす火は宝石のように輝いていた。

翌日繊維工場の人達と会い紡糸の打合せを行ない、仕事を終え暑さに追われる様にして名古屋駅についた。丁度中央線の木曽福島行の普通車が出る所だったので飛び乗った。福島の駅についたのは夜も更け、雨ははげしく降っていた。中仙道の宿場の古い旅館に落ちついた時今迄の緊張が消えて行った。御岳登山のシーズンも過ぎ宿はがらんとしていた。枕の下を流れる木曽川の流を聞いている内に深い眠りにおちて行った。

翌朝木曽路をバスで小木曽の方を通り信州の白骨に行こうとしたがバスは季節外れの為なくなっていた。宿の人達と駄弁っている内木曽路の昔話になった。そして昔の面影は年々となくなって行くのを惜しむ話となった。その宿の主人は一冊の写真集をとり出した。滅び行く木曽路を写した写真文集であった、写した人は沢田という一介のダム工事の土工とのことであった。著者は毎日の殺気立ったダム工事の飯場の中で暖を見て写した写真が同僚達の心を静め、皆が正しい小使を出し合って作りあげたものだとの事、名もない人達の心の美しさと、その写真文集の美しさに引かれて私は一冊分けて頂いた。四日市での若い人達の前で話した時受けた謝礼が此の美しい写真集になった事にも深い縁と云うものを感ずる年になってしまった。

そして私は一人の旅人となって写真集を前に講演の資料の入ったかばんを後に振分けにして木曽の深い山奥に入って行った。開田高原の西野の部落に次の日の宿を求めた。松虫草の青、日光きすげの黄、車百人の紅、その花野の中をヒオドシ、ミドリ斑紋、黄ベリタテ羽等の蝶がとび廻っていた。次の日は原始林におおわれた木曽の峠、飛弾の峠、信濃の峠の長い長い山旅を行った。飛弾より信濃へ越える古い街道の野麦峠で足をいためてしまった。文明の未だ及ばない古い道は心静まるものではあったが、痛む体にはその不便さがうらめしくなった。四十を半ば過ぎた年には町を歩く姿での十里の山路は無理であったかもしれない。峠の廃屋で野宿も考えたが、それもならず痛む足を曳きずって峠下の部落にたどりついた。親切な村の人に電話で遠くはなれた部落より車を呼んでもらい黒川渡の温泉宿にたどりついた時には始めて文明の有難さをしみじみ悟った。次の日は白骨温泉についた。古い湯治場だ、此の湯につかっている内に狂い始めた私の体は調子をとり戻した。

古い道、新しい道、美しく調和する日は何日来るであろうか。

さに迫わ
が出る所
しく降っ
て行った。
木曽川の

がバスは
昔話にな
た。その
真文集で
った。著
同僚達の
名もない
けて頂い
真集にな

かばんを
の部落に
その花野
た。次の
山旅を行
った。文
その不便
里の山路
ならず痛
で遠くは
には始め
い湯治場
た。

パルプ工場から

3回生 金井政洋

昨日無事江津に着きました。今僕の頭の中は日本海に流れ込む沢山な泡と波の運んで来る風に舞うその風船の群と、あのドラムバーカーのものすごさと何よりもチッパーの耳を聾する騒音でがんがんなっています。

一昨日はお見送りありがとう。瀬戸内から日本海へ抜けたわけですが、太陽は相変らずひりひりと照りつけたものだから窓のそばで外ばかり眺めていた僕の腕は焦げてしまったようです。

全く惜しいようないい天気で空は紺青、どこまでも続いていたのです。どんな所にも道はあり、家がありそして人間が生活しているのだなと考えると不思議な感じがしました。

山の中にはきれいな渓流がいくつもあり、一緒に遊んだ頃のことが思い出されました。

幸ちゃん、僕は本当に驚ろいてしまいました。山陰は米子から下ったことはなかったのですがその海の美しいこと、今まで海がこんなに美しいと感じたことはありません。丁度天気が良かったのでいつもはこうではないでしょうが、澄み切った海の色相は何よりも僕を満足させました。

時には一点の汚点もない広々とした海を眺めたり、又到る所にほんとうに小さな入江があり、ごつごつした岩の透き通る緑の深い入江や、松の緑と海の青で縁どられた人っこ一人いない白浜。

あんな所で一日中遊んで暮せたらどんなに楽しいことか。

あの松の木がさしずめやしの木だったら、あこがれのポリネシアの島だったかも知れない。日本海でポリネシアを連想するのは少し変かな？

でもこちらの海岸の砂浜は本当に白いのです。握ったらさぞさらさらと流れ落ちることでしょう。

瀬戸内の砂浜はほとんど花崗岩の崩れたものだから粒もいくらか大きくてねそべってもちくちく痛いのですが、こちらは本当に柔かそうです。

山陰の意外な明るさに今までの山陰という言葉から来る偏見を再評価せざるを得ませんでした。

それから気がついた事ですが、山陰の屋根の瓦は釉薬が塗ってあります。

大きな邸宅から小さな家畜小屋に至るまで、お寺の広い屋根も全く濃い海老茶色が輝いているのです。全部が全部というわけではなく新しいスレート瓦も見かけたのですが、ほとんどがその紬錆のかかった美しい瓦なのです。見ていて本当に美しいと思いました。

出雲の辺りでしばらくは、一軒一軒北西に端正に刈り込まれた防風林を持った散村が続きました。それが目の前で走馬燈のようにくるくると回って行くのです。

やがて遠くにとんで行ってしまって、丁度箱庭の盆景を塗りつけたばかりのおもちゃの家のようになつかしく思われました。

砂浜にいっぱい拡げて干している煮干の、あのまいわしの生臭いにおいのする風を通り抜けたり、海辺の柵のように立並んだ松林の間から、ちらちらと明るい日本海がのぞいたりして、全く退屈することなく過ぎていきました。

松江から三時間程下ると、岬の燈台の向うはもうパルプ工場でした。自家発電所の長い煙突からは黒い煙が真直ぐに立ちのぼり、製葉塔がどっしりと高く位置を占め、原木が海の上に突出した岬の向うの方まで続いているのが先程から曇り出した空の雲間からほとばしり出た光束に照らされていました。江川の鉄橋を渡ると江津の駅です。

会社の人に案内され、無事僕等の実習先である山陽パルプ江津工場に着いたわけです。

宿所にあてられた社宅は、工場長の社宅ということで広くていい所でした。先着の三人の者を紹介され、実習生は全部で六人だということもわかりました。それから附属病院や、食堂、浴場、売店などを案内してもらい、それから駅前から工場の門までの約三百米の江津の繁華街もめぐらしげに歩いたものです。

人口三万にしては立派すぎる市庁舎と映画館のある所です。しかし bar、喫茶店、飲屋なども一応そろい、都会の一角としても別に不思議はなく十分通用するだろうと思ったりしました。

後で先着の三人からお近づきのしるしとして一杯御馳走になり、一寸ばかりしめっぽい蒲団で眠っかれぬオー夜を明かしたわけです。

月曜の今朝は七時に起きました。（一寸信じられないでしょう）一番に労務課へ行くよう言われていたのですが少し早過ぎて皆んなが出勤してくるまで石段の上に腰をかけて待っていました。工場内は海岸なので砂地で、相当大きな松が林立しているのです。

課長さんから話があり、オーに大切なことは怪我をせぬことなのです。

工場長、室長と紹介され、さらに配属は試験課に決まり、そこの課長さんからMW, SWの測定という皆目わけのわからない実習テーマを与えられたのですが、これはMWはマーセル化抵抗、といい、SWの方は硫化抵抗というもので、この物を内外色々なパルプについて測定し、ビスコースの性能と如何なる相関関係があるかということを究明しようというのです。

つまりパルプをNaOH（苛性ソーダ）とCS_2（二硫化炭素）で処理しビスコースにするのですが、これらによっても変化せぬ部分の大小がビスコースの沪過性や、α-Cellulose, β-Cellulose, その他とどんな関係にあり、ビスコース、レーヨンとした場合に適当な条件は何かということをみつけようというのですが、まあそれはそれとしてパルプ工場に来たのだから先ず工場の見学をしたいと思い、課長さんに頼むと早速承知して呉れ、午後から案内するよう主任さんにいってくれたのです。

百聞は一見に如かずで、幸ちゃんもぜひ機会をみつけて見学することが出来ればいいのですが、興奮未ださめやらぬ僕の見学記をパルプ製造行程の順に述べようと思います。

この工場で作られているパルプは、現在業界の割九割までがこの方法による亜硫酸法パルプで、或いはサルファイトパルプとも云います。この方法によるパルプは一般的に言って、Hemicellulose を加水分解する力は強く、Cellulose（繊維素）を犯す事は少いといわれているので、純度が高く化学せんいの原料としてはこれを使用するのです。

先ず原木

針葉樹の方が都合いいのは勿論ですが、現在原木の赤松が高価なのでほとんどが広葉樹で、約五十種位の混雑物だとの事です。主なものはナラ、カバ、ブナ、ポプラ等で、品質の均質化又は良質化に難点があるのですが、資源面、貯木（Seasoming）の問題、（広葉樹は針葉樹のように樹脂分は多くないので、特別に貯木ということは必要ないということです）から考え合わせて、今後研究の余地があるように思いました。一山八百石、一日大体三千石使用されるということであるから四山が消費されるわけであるが、その原木の量に驚ろいてしまいました。

しかしこれで約一ケ月分の在庫だということなのです。

ドラムカバー

つまり回転円筒皮むき機のことで、構造は至極簡単で丁度直径4～5m、長さ10～15mの両端が開放した大きなドラム缶がごろごろとゆ

つくり回転して、一方の端から約2m位の原木が入って来て水と一緒に摩擦によって樹皮がむかれて行くのですが、数回まわって他の方の端から出て来る時にはきれいさっぱり裸になっているというわけです。もし不完全であれば、手を加えます。

簡単でいい方法です。能力は約30m³/時ということになっています。

チッパー

ドラムバーカーのものすごさもそうですが、何といってもこのチッパーの底知れぬ騒音には敵いません。

チッパーというのはチップ製造機とでも言ったらいいのですが、あの大きな丸太を上からどっと落し込み、バリバリと比べようもない音を立ててみるまに厚さ0.5cm、5cm角位のチップとなるのです。

次の蒸解工程で蒸解剤の浸透をよくするためで、そのためには薄い程良いわけなのですが、繊維を切断してパルプの品質にかかわるのであまり薄くも出来ないわけなのです。

木ガマ

チップはチップサイロといって中世の牢獄のようなコンクリート造りの塔に貯蔵し、この木ガマに運ばれて来るのです。木ガマというのは蒸解缶のことで、工場の人達は木ガマ、木ガマと呼んでいます。この大きな鋼鉄製のカマは耐酸練瓦で内張りしているとのことです。

亜硫酸ガスが鼻を強く刺激し、この部屋に長くいると咳まで出て来ます。でもここの人達はもうなれてしまっているのですね。

直径6m位高さは底と頭部は隠れて見えないのだけれど、さあ15m位はあったでしょう。一基で能力は200m³で一回に約20tonのパルプが製品されるわけなのですが、合計六基の木ガマが始動しています。蒸解時間は8～10時間で反応の温度は130～140℃、圧力は7～8気圧にするそうです。

蒸解というのはつまりCellulose以外の不純な物質、HemicelluloseやLignin（リグニン）を除去することなのですが、蒸解行程は製造されるパルプの品質を左右する重要なポイントとなるので、この際の化学反応については多くの研究により、その機構についても色々の説があります。

蒸解剤は製薬塔から送られて来ますが、その主成分は石灰石に水とSO_2を作用させて得られる$Ca(HSO_3)_2$のH_2SO_3 etcとの混合水溶液なのです。酸性亜硫酸カルシウム溶液は常温では透明であるが加熱す

ると解離して亜硫酸カルシウムの沈澱を生ずるのです。

$$Ca(HSO_3)_2 \rightleftarrows CaSO_3 + H_2O + SO_2$$

その上木材に対しては $Ca(HSO_3)_2$ よりも SO_2 の方が迅速に吸収される傾向があるので、蒸解中に $CaSO_3$ を沈澱する方向に平衡が移動するので、これを防止する過剰の SO_2 を吸収せしめておく必要があります。それで蒸解剤の組成を表わすのに普通 SO_2 の量を用いるのです。つまり $Ca(HSO_4)$ を $CaSO_3$ と H_2SO_3 の混合物と考え、CaO に結合した SO_2 の量が Compound SO_2（化合 SO_2）で Total SO_2（全 SO_2）から引いたものが Free SO_2（遊離 SO_2）なのです。

蒸解反応の終点を知るには大体は時間で分るのですが、その時になると経験によって蒸解液の色に頼っているのです。比色計や pH meter は設置していますがやはり人間の目による職人芸に頼っているようです。

製薬塔

一見して大した高さではないように思われますが、これが 48 m だと聞けばそんなにあるものかなと思わざるを得ないでしょう。

パルプ工場の特徴ある建物で、この塔があればサルファイトパルプの工場だと思えばよいのです。

つまり蒸解剤を製造する塔ですが、直径 3 m 位の円筒の中には石灰岩がつまっており、頭部には水槽があり、水を雨状に流下して SO_2 ガスは塔底より導入するのです。

最初、水に不溶の石灰岩は $CaSO_3$ となるのですが更に SO_2 を吸収して水溶性の $Ca(HSO_3)$ となり塔底に溜まるのです。そして反応によって生成した CO_2 と SO_2 のガス中に存在していた O_2, N_2 のガスは上昇して塔頂側部より排出されるのです。

SO_2 はサルファバーナーで硫黄を燃焼して作るのですが、この世の物とも思われぬ極彩色で燃えるのです。

洗浄、沪過、漂白、純化工程

蒸解を終った物はブローチェストと呼ばれるチェスト（chest）－大きなバットのことです－ の中に送り出され、このかゆ状のサスペンジョーンは水で洗浄されながら、色々な機構のスクリーン（ふるい）、フィルター（例えば円心分離機のようなものにかけ、軽い不純物は中心部に集まり除去されるといった具合）にかけてごみや蒸解不完全の

木屑を　こうしているうちにほとんど白い物となりましたが、これから塩素で漂白し、一般に化学繊維とする場合、α－Cellulose 90％必要で苛性ソーダで低重合度部分を除き、それからバイポで過剰の塩素を除去するのです。これらの工程では力ユ状のパルプをシックナーという大きなローラーで圧搾して平板な物にし、それを又次の行程に移る時はミキサーでばらばらにもとのかゆ状とし、反応塔の中で反応させ、それから又シックナーという具合に繰返すのです。

ゴミやチリを嫌うので床もきれいにしてあり、見学者のためにも到る所に足ぬぐいがおいてあるのです。

高い窓からは原木の山と広々とした静かな日本海が目前に眺められ、汗ばんだ体を涼しい風が通り抜けて行きます。

セントリークリーナー

これは機械的に純化を行なうもので残っているHemicelluloseとか、チリやゴミを除去するのですが、比重を利用した原理は簡単ですがそのメカニズムには感心しました。

抄造工程

抄造の前に定濃度チエストで一定のパルプ濃度を保つように調整します。

抄造機は長網式で巾約3m　長さ10m位の漉網を使用し、この漉網は数十個のテーブルローラーによって支えられて進行し、このワイヤーパートからフエルトにのったままプレスパートに進み、水分は80％より60～70％　位までに圧搾され、さらにこのパルプはドライパートに移り、直径2m位のローラー十数本を通過しながら加熱水蒸気で乾燥され、水分は4～7％までになります。

製品

カッターで自動的に切断され、巨大な油圧機でプレス荷造りされ製品となります。六包で約1tonあり、日産200tonとすると1200包のパルプが送り出されるわけです。

見学を終ってほっと一息つこうという時、抄造室の入口からはなだれ込むように風が吹き込んで来ているのです。

しばらくはじっとしていたのです。

「6.21闘争に反対して、加わらなかった皆さんへ」を読んで

2回生　鈴木 紘次

CHAIN, No. 12 に投稿記載された「6.21 斗争に加わらなかった皆さんへ」と題する逸見君の反論の中に、僕が述べた意見のように思われるものがかかれている。あのクラス討議のときに、僕が述べたことと内容がちがっているので、訂正し、かつ再反論をしてみたいと思う。

6.21 デモ決行に対してのクラス討議の際に、僕は前記の反論の中でいわれているように、デモそのものを否定するとはいわなかったはずである。ジグザクデモに対しては、僕は絶対反対であることは、今もその考えは少しも変っていない。学生の唯一の抵抗であるデモをも否定しているという意味に解釈されたことは、非常に遺憾である。と同時に、僕は、デモそのものは認めるが、その方法において、ジグザグデモには反対であるといったはずである。安保斗争等に対して、今までジグザグデモ等により、かなりの成果を上げてきたことは事実である。しかしそれも市民から学生だからという特別な目で見られてきたことも忘れてはいけないと思う。
そして一般の人の迷惑をかえりみないつけ上り的な態度は断じて許せるものではないと思う。市民にも迷惑をかけず、一般市民にも理解してもらって進んで参加してもらえるようなデモでなければ、その効果は半減するだろう。且つ、何に対するデモであれ、デモに参加する以上、自分自身がはっきりした考えを持つべきであって、烏合の衆のように群集心理でデモに参加しても意味はないと思う。

では、どういう方式のデモが一番いいか。
歩道を静かに行進するデモ方式もあるだろうし、シュプレヒコール等のデモ方式もあるだろう。しかし、現在の僕においては、どの方式が一番適当で、効果的であるか、自分に断を下すまでに至っていない。

またたしかに現在の僕は、理論的すぎて、行動力に欠けるという非難をうけるかも知れないが、それは現在の自治会の行動方式に、全面的に賛成していないからであって、本学の自治会が、学生の本分を自覚して、もっとも適切な且つ効果的な行動方式をとるならば、僕は喜んで、それらに参加するであろう。尚、ついでながら記しておくと、あのときのクラス討議において

決議文が提出されたが、僕は反対した。なぜならその決議文には、討議の対象となった大学管理制度の反対と一緒に憲法改正反対という条文が入っていたからである。僕自身としては、憲法改正には反対する立場をとっているが、あのときは憲法改正のことについては、何一つ討議せずに決議文の条文に入っていたからである。府学連の方針に従って、あの条文を入れたとも推測しうるが、本学自治会としては、何ら討議されていない事項まで条文中に入れるべきではなかったと思う。

長柄橋

1回生　岡本　進

日はようやく沈み、空はみるみるうちにその黒さをましていた。

僕はすっかり疲れていた。

電車は、これもすっかり疲れたというように急ぐでもなく止まるでもなく、歩くように進んでいた。

新淀川の鉄橋にかかると、水の少なくなった河原は所々に水溜りを残していた。緑色の草に囲まれた青い水には長柄橋の水銀灯の白い灯が長くのびていた。

橋は鉄橋の50mほど下流にかかっている。その向こうには、つき始めたネオンが三つ四つまたたいていた。

ここを通る度に僕は、長柄の人柱の昔話を思い出す。

その昔、度々の出水で沿岸の住民を苦しめていた淀川は、ここ長柄でも、大水を出しては、人々が汗水をたらしてかけた橋を流してしまう事が度々あった。かけてもすぐ流される橋に人々はすっかり頭をいためていたが、ある日この地の名主が川の怒りを静める為に人柱を立ててはどうかといい出した。

人望あつく、人々の尊敬を集めている名主のいい出した事であるし、他の多くの人々も心中秘かに考えていた事なので、異論はなく、すぐ実行することになった。

しかし、さて誰が人柱になるかという所で、皆は困ってしまった。適当な人間がいなかったのだ。そこで人々の目は自然と名主の方に向けられた。

名主は――それを自分で云い出したばっかりに――だまって長柄橋の人柱にならねばならなかった。

やがて橋は完成し、人柱のおかげか、橋はその後流される事なく、長柄は

平和な日々が続いた。

この名主にサクヤヒメと呼ばれる美しい娘がいた。

サクヤヒメは、父が人柱になっていらい、急に口を閉ざし、一言も話さなくなってしまった。

父は人々の犠牲になったのに、家はおちぶれ、娘は変り者と、人々に相手にされず、母と二人寂しく暮していた。

しかしこの娘にも、河内のミタケヒコという若い金持の男から、ぜひ妻にという話がまい込んできた。

娘は一言も話さず、母にも反対する理由もなく、話は決まり、ミタケヒコはサクヤヒメを迎えに長柄へやってきた。

ミタケヒコは心のやさしい立派な男で、不幸なサクヤヒメを何とか幸福にしようと色々心を尽すのだった。

やがてサクヤヒメはミタケヒコと共に河川へ出発した。

ミタケヒコは道中も、サクヤヒメを少しでもほがらかにしようとしたが、サクヤヒメはやはりかたくなに口をつむったままであった。

一行が歩き疲れて一休みをしていると、そばの草むらで突然キジの鳴く声がした。ミタケヒコはすばやく矢をつがえ声のした方を射ると、心臓を射られた一羽のキジがとび出して道におちた。

これをじっと見ていたサクヤヒメは

もの言はぬ　父は長柄の人柱
キジも鳴かずばうたれまいに

と歌をよみ、初めて涙をハラハラとこぼして泣いたのだった。

これを見たミタケヒコは、父を人柱にされたサクヤヒメの心の中を思い、父の気持もわかりながら、人に話すことの出来なかったサクヤヒメのくやしさを思いやって、共にハラハラと涙をこぼしたのだった。

この後、サクヤヒメは元の朗らかさにもどり、二人は幸福に暮したという事だ。

今では　　もう人柱なんぞ昔の夢物語だろうか。

今だに、一度集中豪雨がくればケツ壊の恐れのないといえない頼りない堤防に頼っている我々は、又人柱でも立てて、川の神さまの怒りをお静め下さい、と祈るよりしかたがないだろうか。

ネオンが流れる水に映り、ゆらゆらゆれて、まるで夢のように美しい。

報らされることを拒否する権利

内藤謙一

戦後も既に17年の歳月を経て、今や我が国は空前の発展期に立っているといえよう。街には自家用車が充ちあふれ、家々には電化の限りをつくして人々は快適の生活を享受していると考えられる。おびただしい種類の娯楽が存在し、暇つぶし、時間つぶしには事欠かない。戦中、戦後しばらくの間、極度に生活の貧困さ、貧困さを経験した私は、今のこの繁栄を半ば感慨にふけりながら、今の若人たちに一種の羨望を感じる。戦時中、未だ中学時代に洋楽を禁止されている中で、友達の家で電蓄に耳をくっつけて「ラパロマ」や「帰れ、ソレントへ」などを聞いたのをなつかしく思い出す。

戦時中に極度の制限を受けたニュース網が、戦後はその反動で素晴らしく拡がり、人々はむさぼるように、色々の知識、報道を吸収したものである。その後段々とラジオの局数は増し、テレビの出現と相俟ってそのニュース網は益々拡がり、書籍の出版数もおびただしく増えて、今の若人の物識りは驚くばかりである。

而し乍ら、此の頃少し感じるようになって来たのは、余りにも多くの娯楽があり、報らされることが多くて人々は、どの事が大事で他のことは忘れてよいのか、どのことは全く知らなくて恥にならないのか、そのけじめに苦しみいささか精神が疲れているのではないかということである。

"エチケット"という言葉が云われ、それに反すまいとして、なれない手付きでフォークを握り、汗をぶるぶるかきながら、上着を着てネクタイをする。一分のすきもない恰好をしながら年寄りに席をゆずらない。

余りにも多くのことを報らされ、報らなければならないので整理の暇がないのであろう。一体何のためにそんなに多くのことを報らされなければならないのか、映画俳優の誰と誰とが何時結婚するとか、その費用がいくらであるとか、力道山がゴリラにかみつかれたとか、そのようなことが我々に何の関係があるのか、テレビ歌手が引退するとかしないとか、それが一体何だというのか。余りにも多くのことを知っていて、何も知らない。いわゆる、"Dringend neugierig"である。この責任は勿論数多くの週刊紙、スポーツ新聞等のマスコミ関係や、それらを飯のたねにしている人々にある。

彼等は、そのプライドをどのように処理するのであろうか。

私がここで云わんとしているのは、勿論、自分の狭い専門にとじこもれとか、言論を取締れとか、そのようなことでは毛頭ない。むしろ広い知識こそ専門家に要望されるものであり、それによって専門も生きて拡がりを持って行くのであるが、全く余計な知識、知る必要のない事もまた、多々あるのである。我々がその余計な分野でどのように無知であろうと、別に恥でもなければ、田舎者でもない。話の泉式の人間がどのように生産性にプラスするであろうか。我々が生活を自分のペースでやって行く事は活々とした精神を維持する上に大切な要素と思われる。その為には、自主的な強制されない知識の獲得、よく篩にかけられた言葉、つつましい報道が必要である。

一見、華やかそうで、その実、泥くさい、貪しい流行語、センセーショナルで而も空疎な報道、先つ走りの中途半端な知識、これらが如何に人々を委し、疲れさせていることか。私は社会と迄は云わないが、少くとも自分の心身の健全を保つ為に、出来る限り無用な報道、知識から遠ざかりたいと思う。私は、必要なことを報らされる权利を持つ反面、不必要なことを報らされることを拒否する权利をも持つことを主張したいと思う。

一回生コーナー

○独語、英語の試験も終りますます夏休み気分にわいていた時、7月7日土曜日11時半より、1回生仲間の親睦をもっともっと親密にという意図で *Chain* 編集部主催、卓球部共催で卓球大会が開かれた。人数32名が参加して皆の協力のもとに全くスムーズにやれ、今までの学園生活で得られなかったものが充足された様である。これからもかような催しはあらゆる面においてやっていきたいと思っている。それもC科全員、かつは教職員を含めたような盛りあがった対抗試合などもぜひ実現したいものである。なおその時の結果は優勝牧田輝夫君、準優勝小嶋一見君であった。最後に好意に設備をかしてくれた卓球部や進行の面でのクラブ員の協力には紙上のみの御礼ではいい尽せない。

◇

○夏休みも終った今、我々の分析化学実験はいよいよ定性分析をおわり、定量分析に入った。前者の如く雑なことはできないので、どうしても真剣にな

らざるを得ない。前はドラフト設備が貧弱（少ない）の為時間のロスをうれいたが今度は乾燥器や天秤の絶対量が少いので、全くなさけない。僕らから見れば各研究室の設備とは雲泥の差である。我々の為又後からくる後輩のためにもっと設備をと関係者各位に切にお願いしたい。

◇

○9月20日1時から3時迄倫理学の時間に井上委員長、南沢助教授立合い学会委員の司会のもと、1回生全員が例の公開質問状と現在の執行部のあり方又執行部への希望という提起で討論会が行なわれた。比判、月並と大いに論がはずんで学生大会の出席率にあらわれるような現状とはうらはらに皆の大いなる関心はここに大いに証明された様である。結論としてこのような集会を小単位に（即ちクラス別やグループ別）につくり大いに各問題について討論しつくして学生大会に発表したりしようではないかという前向きの方向が定まった。全く大いに結構で歓迎すべきである。執行部はこれらの意見を大いに参考にして真に全学生からもりあがった自治会活動を推進していってもらいたいものである。

◇

調査局より：1日は全数44名中サークル活動参加者は34名である。延べでサークル別にみると卓球6名、ワンゲル6名、バレー3名、サッカー2名、準硬式野球2名、硬庭2名、剣道2名、弓道3名、バスケット1　水泳、空手、囲碁、能楽が一名ずつでその他新聞会が6名である。やはり運動部系が主である。大いに各方面諸子の活躍を期待したい。それと共に未参加者もこれからどしどし参加して出校サークルの発展に寄与してもらいたい。

◇

最後になったが、我々が発案したことで織化教室の入ったところ（受付けの如き場所）に落書きノートを設置し、そうしてC科生の考えている事や、ふと心にうかんだことや批判や希望を（人前でいえない気の弱い人の為に）書いてもらうようにしようと思っている。結果はどうなるか、又何が書かれているかは神のみぞ知ることであるが、大いに意図をくみとって有意義に利用してもらいたい。価値のあるものは *chain* に記載したりする予定であり、記名、無記名は問わないことにする予定です。

◇

夏休み前に僕が書いたのであるが、効を奏せず原稿は集まらなかった。しかし原稿が集まるまでとだまって待っていてもいつ発行できるかわからないので苦肉の策として1回生諸子になんでもよいからと2・3行ずつ書いても

ロスをうれ
。僕らから
る後輩のた

教授立合い
行部のあり
並と大いに
はらに皆の
のような集
題について
向きの方向
らの意見を
していって

名である。
、サツカー
ツト！　水
やはり運動
共に未参加
らいたい。

ろ（受付け
いる事や、
人の為に）
可が書かれ
有意義に利
予定であり、

かった。し
っからない
っ書いても

らうことにした。以下がその各々である。さて何かとびだすことやら。

◇

パラがへったパン代がない、よってチエーン代は未払い！悪しからず

(O.O.)

◇

山に登る事はどういう事であるか？真面目に考えてはいけない。常に楽をしている事の罰として、エネルギーを費して苦しみを与えられに行く事である。人間楽ばかりするものではない。適当に苦しむべきである。（K.T.）

◇

来年の私の標語を発表しましょう。

泣いてェ、エ　過ごそうか、泣かずゥーゥにゆこうか

蝉と蛍ゥー、の　限くらべ

私は　もっぱら　蝉で行きます　(S.K.)

◇

コイに恵まれない我々は近頃もう一方のコイ即ち教室中庭のコイで満足してコイに熱中している。全く精神高揚剤の前者のコイに反して、こちらはすばらしい沈静剤である。それにしてもまわりの花壇の雑草をぬいたり、ドラム缶を片ずけたりしてもっと落ち付いた雰囲気にしたいという風流人はいないだろうか。中庭だけは心のオアシスとして存在させたい。　(T.U.)

◇

5時に寝て8時に起きて、眠けまなこをこすりながら、おぼろげに講義を聞く。その中に本当の大学生活があるらしい。　(Y.M.)

◇

授業が終った。教室外へとび出す。学生数が少いせいか、余り人にも会わない。全く大学内はひっそりとしている。そして私の周囲には古ぼけた建物とぼうぼう生い茂った草木、夏休みも過ぎてしまってもやはり、その空気はじっとよどんでいた。あるなつかしさ、そしてまた、けだるいような、眠っているような沈滞感 -----。　(K.Y.)

◇

「乙女とたわむれし、森の小陰で」　ああいつになったらこの様な状態になれるか、数学の講義の時こんなことを思うのだから実に実に ----

(H.T.)

◇

自転車通学しんどいけれどのらりくらりと何でも見れる　(京都っこ)

◇

この文章を読まない方がよいと思います。やはり読んではいけません。あなたは私の言う事を聞かずに読んでいますね。お願いします読まないでください。！ああ!あなたはなんという人でしょう。私の願いを聞かずに最後まで読んでしまいましたね！ (A.K)

◇

ああ語学はむづかしい。一英語・ドイツ語・日本語(?)一どうやら来年回しになりそうだ。数学の時間にこんなことを考えているんでは、これも…

(Y.M.)

◇

皆んな種々多様のことを考えている。今学生を二つのタイプに分けると、勉学連（くそ真面目）、遊学連（マージャンパチンコその他の遊びやクラブサークルにうつつをぬかす）、全学連（自治会、新聞会等の奴）に分ける。自分はおそらく遊学連に属すると思う。実にこの学連はいちばんつまらない。しかし去年一年あたら青春を予備校通いのために失った今大いに大学の青春を楽しみたい。もちろん卒業時には優を多くそろえて出るつもりはしているが二つ共うまくいくかどうか確信はもてない。 (K.T)

◇

この世から試験なんて追放してしまえ、!! そうすれば、大学は素晴らしいものになることがわかっている。 (Y.I)

◇

くだらんドイツ語、いやーなドイツ語、やめちまえ (K.N)

◇

定量定量いうけれど、僕の脳みそ定量すれば、チンピンにかからぬ程軽かった。定性定性いうけれど、調べる前に僕の性はわかっている。(Y.A)

◇

ドイツ語で得意なのは、名詞の性への判定、ドイツ語やり出して益々この道の权威となりにけり。 (T.O.)

◇

〔特報〕工織に「小日本売国党」の細胞ができました。

定年も近いのに可愛そうな彼らです。 (H.Y)

◇

特別手記

獄窓 より送る

ミナサン工織の学生は、ダイタイにオイテ不活発、無関心である。
これは一体どんなことに原因があるかよく考えて下さい。
工芸と織維、両学部を一つの場所に集めることはできないものか。
それでなくても少ない学生が ------
織化の諸君、仲良くしようぜ、建築科のシュウサイ（臭ヤ）より

◇

我楽苦多草子

すさまじきもの、土曜日の午後の授業、草の繁茂する運動場。
おぼつかなきもの、たった8ケ年で卒業できるかどうか、ドイツ語の成績、
ありがたきもの、学長の顔を見る事。ミスターエチソンの講義。
かたわらいたきもの、チエーンの編集、自治会の活動。　（青小納言）

◇

すべてがメカニズムによって支配された社会。それを作り出した人間どもは決してメカニズムからはじき出され又は奴隷にされてはたまらない。なぜなら我々は自己を自覚出来る動物だから　（I.K.）

◇

工織の学生は不活発不活発というけれど不活発なのは自分じゃないのか？

◇

天高くして馬肥ゆる秋---- 天高くして試験重なる秋-----秋風おもむろに来りて試験用紙我が髪をなでる。嗚乎！入学試験の思い出、微かに頭をかすめる。大学では試験は年に二回だけだ。大学生万才　（K.T）

◇

なぜいってしまったの？とおいあの国へ。五月(さつき)の雨にぬれていた。ほおにそっと接吻した時、あなたはふるえていた。あれほど愛していたのに。
なぜいってしまったのとおいあの国へ。　（A.A.）

◇

朝起きて大メシを食わしてもらえるし、電車の駅までいったらサラリーマンや学生がたくさん電車を待っているし、二ケ月前とはえらいちがい。
バンザイバンザイ　（新下宿生）

◇

以上が取り敢えず数人に書いてもらったのだが、なんだか馬鹿らしかったなあと思われる。しかし大学生活を経験して　半年の我々がいまその瞬間何を考えているか知り得たのである。　9月24日

担当　鵜野高資

実習記

3回生 有松利雄

大体皆三回生の夏に実習に行くようである。実習先は民間会社の工場、研究所の他工業試験場、衛生研究所、工芸指導所、京大化学研究所などがあった。学生の中には自分で会社と交渉して行くものもかなりある。

ところで僕は京大化学研究所（化研と略す）へ行った。理由は家から通うのに最も近いから（朝8時に目をさまして、9時には化研に着いているという具合）。色々の研究室があったがどれということなしで、後藤研究室に決めた。今年化研へ行ったのは9人で、後藤研へは僕を入れて3人である。期間は7月16日から8月4日までということであったが、16日にいきなり行ってもどうかと思ったので数日前に一度行ってみた。

後藤研に行くと本のたくさんある所へ通されて実験の説明を聞いた。後藤先生は非常にきちょうめんな紳士という感じだ。「マイラーフイルムの膨潤について」「毛管分析法による染料の研究」「高分子界面活性物質によるコロイド凝集について」の三つのテーマをそれぞれ3人でやってくださいということで、誰がどれをやるかは僕達の間で相談して決めればよいとのことであった。題をならべても何か何だかわからないので、端から順番に名前を入れて決めてしまった。僕は「高分子界面活性物質によるコロイド凝集について」に決った。いよいよ16日に9時頃行くと、かぎがかかっていて戸があかない。しばらくたってそこの部屋の人がきてやっと部屋にはいれた。さっそく器具やら何やら出してもらったが、メスフラスコが50cc, 100cc, 200cc 500cc 各々2個ずつ。試薬びんが 60cc, ぐらいのものを5,6個と数ℓ、いや数10ℓ位のもの1個、メスピペット、ホールピペット種々、それに長い大きい試験管が20本に3過びん、グラスフィルター、ゴム栓ゴム管秤量管のたぐいはいくらでもある。

先ず数週間放置したベントナイト suspension の上澄液を数ℓ～数10ℓの試薬びんに移さねばならない。この試薬びんを洗うのがちょいと面倒だ。水洗いだけでなくクロム酸混液で洗うのは勿論だが何分相手が大物なので、上澄液をサイフォンで移しとったら今度は重くてもち上げられない。

試薬には各種のP.V.Aを使い、凝集した粒子の沈降距離、速度を測るのだ

が P.V.A. suspersion をどの位の濃度でやればいいものか聞きにいったところ、全然見当はつかないが、P.V.A. の方は先ず 10^{-1}～10^{-6}% 位のところでやってみましょうということであった。10^{-6}% というと器具など余程よく洗う必要がある。クロム酸混液では少々の水洗ではクロムイオンがガラスにくっついて残るので余りよくないそうであるが他によい方法もなさそうである。先ず P.V.A. suspension、蒸溜水をある色々の濃度で調整してみた。時間的に何時頃凝集沈降が観察できるかわからないので、にらめっこをやっていたが、30分たてど1時間たてどその気配がない。濃度を色々かえて色々やっていると、中に1～2本沈むのが出て来た。先生のところへ行くと、「沈むことは沈むんですなあ」、翌日同じ濃度でやってみると今度は沈まない。色々調べてみると添加物を加える順番によって違うらしい。一番よさそうなやつに今後統一してしまう。なにぶん3週間では余り手を拡げるわけにもいかない。ところで化研へ行き出してから数日後ビヤーパーティなるものがあった。今僕達の学校へ物理化学を教えに来ておられる小泉先生の部屋の人におだてられ、そそのかされ、皆飲むは飲むは、ビヤーパーティが終るまでは皆どうもなかったがその後がおはずかしい。実験室でバッタリ、或いはフラリフラリと歩く者、しかし翌日は朝早くからやっと軌道にのり出した実験を続行、沈降実験の合間には suspension の濃度決定とか、実験に供した液を遠心分離しては PH-meter で PH測定を行なわねばならない。沈降実験も10～20分毎の測定で毎日やらねばならないから、ゆっくり昼飯をくうわけにもいかない。幸い慣れと横着というものがあって、次第にようりようがよくなってくる。ところがこの辺で難問題が起ってくるのが常である。一年中で一番暑い此の頃、風通しの悪い部屋の片すみで、沈降距離測定の為にスケールをあてるだけで全身汗びっしょり。全くオレは何の為に実験をやっているのだ。こんな凝集の仕方では沈降距離なんて測れやしない。いや沈降距離が測れるものでも、それは全く意味がないのではないか。僕は全く愚かなことをしているのではないかと思った。しかしそれはそれなりに割り切って実験を続けた。P.V.A.に塩類を添加するとどうなるかについてもほんのわずかながらやってみた。実験の合間には山元さん（我校卒業生、京大大学院・化研水渡研）のところへ行ったり、その他いろいろなところをぶらぶら歩いて部屋やら器具やらを見た。大体2週間で実験をすませ、後データ整理をしたがこれが2週間もかかって結局4週間近く化研へ行った。色々なことがあったが、この実習で得た種々の経験は僕自身にとっては非常に貴重なものであった。

実験室の器具、機器について感じたこと。

化研へいって先ず感じたことは機器、器具の豊富なことである。それに我校みたいにつぶれたものを置いていないことである。我校では、かげかたちはあっても故障で全く使いものにならないのがたくさんある。はては空びんなど草むらにごろごろしているのは汚いかぎり、だらしない限りである。化研ではそうではない。型が旧式になって使わないものは多少あるかもしれない。しかし故障で使えないものは先ずないといってもいいのではなかろうか。

器具については先ずガラス器具、ちょっとでも欠けたものは使っていない。量も問題にならぬ位豊富、ビーカーがないから、或いはフラスコがないから（その他色々）実験が出来ないなんていうことはない。ゴム栓にしてもコルク栓にしても、穴のあいたやつの丁度ぴったりあうやつを探す手間労力の心配はない。カチカチになったゴム栓、こげたコルク栓などあろうはずがない。ガラス器具にはほとんどすり合せを使っていたが、底のやぶれた *water bath* サビついたスタンドなど探しようがなかった（我校ではどこでもお目にかかれる）。

機器については「月とすっぽん」か、遠心分離器、*pH meter*、攪拌モータスターラーその他こまごましたものはちゃんとそろっている。天秤は直示天秤、これは最低限必需品（僕のいった後藤研は従来の天秤であったが、めったに使わないらしい）　ある部屋ではガスクロが一人に一台ずつとか、電子顕微鏡も勿論ある。X線回折装置、赤外線吸収スペクトルの装置もあり、試料に申込書を添えて出せば直ちにやってくれる。データ整理には電動計算機が我校の手動計算機なみにある。電子計算機はおいているのかどうかしらない。

図書類にしても、先ず化研には図書室というものがあり、そこにたくさんの本がおいてある。そして研究室では研究室でたくさんの本があり、僕のいった研究室ではその為に一室使っており、閲覧の為に机・椅子がおいてある。雑誌も数多くそろっている。それで先生は先生で自分の部屋にたくさんの本をもっている。

僕の今迄の経験では我校では実験中、ガラス器具その他に不自由を感ずることは勿論天秤を使うのに人が済むまで長いことまったり、又実験がある程度以上になるとその測定機器がないためできなくなる。それが化研では測定方法が面倒であろうとどうであろうととにかく測定機器はそろっており、順番まちということなく直ちに実験に移せる。不要な邪魔が入らず純粋に真理の探究ができる。こうでないと実験はてきぱきいかないのが当然であろう。

このように我校と化研とを比べるとえらい違いであるが、その化研とても、いや一般に大学研究室というものは会社研究室に比べるとまたえらい違いがあるのではなかろうか。会社の研究所へ実習に行った友達の話を聞いても、それが感じられる。自然という雑誌にも「戦後に濫造された小規模な大学の小さな化学教室が、人の面でも設備の面でも、実際には今日の化学教育に必要な最低のスケールよりもはるかに下まわっているのである」とかいているが、全くその通りだと思う。直示天秤やなんかは最低線の必需品で、消耗品のガラス器具やなんかが足りないなんて、食堂でわりばしが不足しているのと同様、全く問題外である。ものを大切にするのは勿論必要であるが、それが為に不要な時間をとられることは全くおしいことである。高価な機器については「化学」1961年7月号「戦前戦後イギリス」の「イギリスの大学を見て」にあるようなことを参考にして、余り頻繁には使わない高価なものは各研究室共有にしてはどうだろうか。管理が悪くて使いものにならないようにしてはならないが。

ポケット知識

化繊の部　テックスチャード・ヤーン

Textured yarn とは、いわゆる、かさ張り加工を施した糸の総称で、合繊のフィラメント糸及び短繊維糸を含めて繊維自体にコイル、カール、クリンプ、ループなど色々な永久的変形を与えるような加工を施し、非常にかさ張り性または伸張性のある、いいかえれば、見かけの比重の非常に小さい糸に製造したものである。しかもその性質が編織及び後の工程などにも十分に耐え得る優れた安定性をもっている。この加工法は、種々あるが、その代表的なものは、加燃法または仮燃法によるウーリー加工、ナイエッジ法によるアジラン加工、スタッファボックス法によるバンロン加工、エアージェット法によるタスラン加工、その他ウーリーの伸縮性を減少させるような加工を施したサーバー加工などがある。　（松本喜）

原稿募集

内容 ---- 機関紙としての目的に適するものならなんでもよろしい。
形式 ---- 自由（原稿用紙には横書きで題字と姓名の欄を五六行とること。）
締切 ---- 11月末日（次号に掲載のためにはで、特に期限はありません。
受付 ---- 学生委員又は編集部員（原稿用紙入用の場合には編集部員に）
（なお表紙のデザインも歓迎致します）　次行発行予定 —— 12月中旬

断章

3回生 井垣有富

河は流れる、そして時は流れる。時が流れるから河は流れるのだ。時間とは不思議なものだ。目には見えない。しかし絶えず流れてゆく。もしこれを止めようとすれば、光速度でもって運動しなければならない。そのようなことは出来っこない。すなわち時間は停まることなく流れてゆく。

私がこの学校へ入学した時、まだクラスの者の名前もはっきりと知らなかった時、当時3回生だった荒瀬さんと荒谷さんにこのチェーンの原稿を1回生から集めてほしいと依頼された。それが今では、自分が3回生になってしまっている。本当に月日の過ぎるのは早いものだと感心した。その時は何も書く事が出来なかったが、今、筆をとらしてもらいたいと思う。といっても私は余り文章を書くのが得意でないので、私の古い日記の中からダイジェストして書いてみたいと思う。もちろん日記に書いてあることだから、非常にプライベイトな内容であることは避けられないが、しかし若い者は、大なり小なり一度は経験する問題であると思う。日記には"三太郎日記"のようなすぐれたものもあるが、これは一凡人の日記である。

一体何を得るためにこうも苦しむのか、何故にかくも求めるのか。パンタレイ、だが余りにも流れすぎている。ただ愛を得んだために。

思い返すと色々とめぐり来る。流れる泡のようにはかないもの。胸に嫌悪の跡を残したもの、星のようにきらめくもの、そして美しくも清純なもの。よせては返し、返してはよせる波のように、帰り得る河の水の如くに、一旦忘れかけた光も再びてり返す。かくも美しく、かくも純粋に。

永遠なる女性の魂が我らを引き上げて行く。(1958年1月6日)

これは1958年の冒頭に書いてある文章である。ここで最後の一行はゲーテのファウストの最後より引用したものである。

恋愛とは一体何なのだろうか、自分は今迄色々と考え通して来た。その発端は小学校時代に発するのではなかろうか。だがそれから五ケ年間を経た今日、尚依然として私にはわからない。しかし近頃では少し位変って来て全くのめくらではないが、今までの小犬の恋の段階か

ら目覚めて青年としての、人格と人格との関係としての理性ある段階私はこの段階にたどりつこうと思っている。しかしややもするとその理想を見失い勝になるようだ。相手の女性を唯自分一人のものと考えるのはまだその女性の人格を認めていないことであり、感情的な段階をぬけきれない証拠と見られるであろう。

絶えず何物かを求め続けており、絶えず求めることが出来ず追いかけまわしている姿、これが人間の本態ではないか。その求めている段階において人間性の進歩を期待出来ると思うのだが。かといって、求めてやむことの出来ない人間はそれでは不幸であろうか。一概にそうとはいえないと思う。動中静あり、静中動あり、求めてはいるが満足しているという境地には到達できるのではないかと思う。(1958年2月19日)

長くなるので少しとばして1959年に移る。私が浪人だった頃の事である。この日は同窓会があり、私はある女性に会えることを期待して出席したのだった。そしてその女性に会うには会ったが、私の描いていたイメージは脆くも崩れ去ってしまったのだった。その女性の思い出は、ポニーテールの髪と共に今も私の胸の中に残っている。

生きている間は色々と悩みがある。嵐よ吹くなら吹け、僕はへこたれないであろう。抑えるなら抑えよ、やはり僕は伸び上るだろう。いかなるものが僕の前進をはばもうとも、やはり進んでゆくだろう。いかなる絶望がおそおうとも戦いぬくだろう。死ぬまで生き続けるであろう。死ぬまで戦い続けるであろう。だが死ぬまで勝利は僕にやって来ないであろう。どのような名声を得ようと、どのような富をえようと。やはり私に勝利は訪ずれないであろう。安易に流れたくはない。人はすべて死す。私も死ぬことは出来るのだ。また死なざるを得ないのだ。

人間が生まれ、そして死んでゆくのは、この神のいたずらであろうか。何のために人間は生きなければならないのか。何のために人間は生きる事にこうも執着を持つのか。わからない —— だが人間は生き続けてきた。過去何千年、何万年と、そして今後も生き続けるであろう。いつかは亡ぶとしても、何のために生きなければならないかわからないとしても生きているだろう。　(1959年11月8日)

この文中では気の強い事をいっているが、一方では恋に破れ、一方では浪人中で勉強に追われ、私自身、相当に疲れていたようだ。とにかく恋愛という

ものは人間にとって一つの試練であるようだ。ある人は恋愛と学業とは両立しないという。しかし私はそうは思わない。この事については、私は高校在学当時、音楽の先生とよく論議した。その先生は相当進歩的だとは思ったが前者の意見だった。次の文中で林先生とあるのがその先生である。

"人間は恋愛によって向上するものであろうか、堕落するものであろうか。私は前者であろうと思っている。僕は誰か一人の女性に自己の全てを献げたい。お互いに信じ合い、お互いに短所をおぎなうことにより自分も相手の女性も向上するという、そのような女性はいないだろうか。そのような女性が現われ、そのような女性と恋愛し、激しい恋の炎を燃やしたならば、生きることに対してもっと張り合いがあり生きがいが出来、自分の仕事に対して情熱的になることであろう。人によっては恋愛は勉強の邪魔だと考えるかもしれない。林先生なども"恋愛なんか考えずにもっと勉強しなさい、私の若い頃などは恋愛どころか勉強で一生懸命だった"と言っておられる所をみると、そういう考えなのかもしれない。人によってはそれでいいかもしれない。だが私の場合は逆だ。激しい恋愛をし、情熱的になればもっと大きなことも出来るだろう。私はそれをするだけの力は持っているつもりだ。

(1960年2月1日)

そして三月に入学試験があり私は京大をすべり、この学校へ入学した。その頃の事を書いてみる。

"新しい大学生活が始まってから一月余になる。最初の二三日は遅刻をせずに通ったが、近頃は10分から15分遅れる。もう、早く夏休みが来ないかなあと考えるようになってきた。

僕が現在の大学へ入った時僕は何とも感じなかった。期待すべきものもなかった。新しい大学にたいする抱負もなかった。プライドもなかった。何か活躍しようという意気ごみもファイトもなかった。何もなかった。そのような考えを持つには、余りにも疲れすぎていた。疲れ切っていた。浪人生活のために神経がすり切れていた。府大の合格発表の時、自分の名前を見つけ"やれやれこれで浪人をまぬがれた"と思った。全くほっとした気持になった。私は現在工繊に通っているが、これは補欠で入ったのだ。だが私はどちらでも大して変りなかった。ただ皆が工繊の方がよいといってくれるのでそちらにしただけだ

った。どちらでも浪人をまぬがれたということは同じだった。だが、府大の方が女性が多いからこちらの方がいいかもしれない。今日までずるずると学校へ通っている。

これには日付がなかった。書き忘れてしまったのだ。多分、1960年5月頃の事だろうと思っている。今から考えると、10分や15分の遅刻などしおらしいものだ。このような状態だから勉強など何も出来なかった。そのうちに何とかなるだろうと思っていたが何ともならなかった。気が付いたら三回生だった。とにかく私は大学以来は徹底的に現実を逃避してきた。もっと良い方法がみつかれば良いのだが、残念ながらそのようなものはなかった。とにかく、私が如何に学業に熱心であるかは、C科3回生ならば誰でも知っているはずである。一度聞いてみられたらよいと思う。

過去何年かの間、彼は一つの星を捜し求めてきた。だけど一度もつかまえることが出来なかった。そして彼は尚も星を追っかけている。彼はもう失恋に対しては免疫が出来ている位だ。それでもやはり、力を落すだろう。

絶えず追い求めている姿、恋愛にしても学問にしても、
それが人間の本当の姿ではなかろうか。
人間の本当の美しさではなかろうか。

1962年9月　Lonely Tired Romantist

編集部紹介

4回生	木下	泰志		2回生	加原	敬助
	沢野	敏実		1回生	鵜野	高資
3回生	有松	利雄			小川	信夫
	金井	政洋			宮崎	能久
	樋本	勲				
	堀江	宏				

「ある頭の良い男（英雄）と頭の悪い男（鈍雄）の会話」 ―学生運動―

3回生 五十歩百歩

英雄：「我々は米帝国主義及びその手先たる池田反動内閣には絶対反対である。最近の一連の反動政策に断乎抗議してデモをしよう。」

群集：「デモだ、デモだ、さあ行こう！」

鈍雄：「何でデモするんですか？」

英雄：「我々がこのまま手をこまねいて見ていたら、我々の日本はどうなるんだ。我々は我々の考えを一般に知らす為に我々はデモをしなければならないんだ」

鈍雄：「交通をとめたりして、みんなの迷惑になってもですか」

英雄：「我々は民主主義を守らねばならない。我々は交通妨害になった人たちに心のなかで謙虚にあやまりながらも反動政策に対して抗議のデモは行なわなければならない。我々はあくまで民主主義を守りとおすのだ。君は学生運動の厂史を知らないのか」

鈍雄：「厂史はどうかしらないが、交通を一方的にとめたりしたら民主主義の精神に反するのではないんですか」

英雄：「我々はそんな小さなことにこだわって、将来の日本を運命づけるような大きなことをほおっておいてよいものか、日本の将来をきめる大事なことの為には少々の犠牲は止むを得ない、我々は池田反動内閣に断乎として斗かおう」

群集：「さあ行こう、行こう、デモだ！　デモだ！」

鈍雄：「------民主主義に大きいのと小さいのとあるのかなあ、民主主義を守る為には小さい民主主義は犠牲か、わからないなあ、やっぱりオレは頭が悪いんだなあ　------　」

インキがついた布のしみ抜き法

ブラシ、ヘラなどでロート油をしみにつけ、更にアンモニア性アルコールを用いて上下に軽くたたく。この時しみの下には晒木綿つきの下敷き板を入れること。これでインキの色素が抜ける。その後、ブラシを水にしませ、しみの部分をゆすぎ、更にスチームガンでぼかし、蓚酸（10 g/l）をつけ、再び、水洗、スチームぼかしをする。（アンモニア性アルコールは28％、アンモニア水とアルコールを1：1に混合したもの）　（松本岳）

近況報文

4回生 原　隼

少頃御無沙汰していた。暑中見舞を筆不承した小生が何の今頃といぶかるかもしれないが、別に他意はないから安心して貰い度い。君が今年、京都大学工学部電気学科という物々しい所から国鉄に就職して今門司駅で切符切りをしていると聞いた時にはつい嬉しくなってふき出してしまった。そのコントラストの妙にって訳だ。今後も窓拭きから踏切りまで大いにやるがいい。否、怒るな、此も君を思えばこそだ。親友の情と感じ入ったら何も云わないから土産でも下げて来るがいい。手紙の特权で君の口を封じて勝手なおしゃべりを押し付けたがさて小生はとなると。

あの年、人も羨む我々四人組が揃って"京大電気"を受けた訳だがお前とMとが入って、Kは二次志望の鉱山学科へ、そしてこの俺は浪人して初めてその名を知った京工繊大で糸屋を目指す羽目になった。今では某繊維会社に就職も内定して完全に観念してしまったが、あの頃は考えてもみなかった"化学"へ足を踏み入れて、大阪府大機械工学を捨てたのも何かの縁かもしれないな。俺は時々実験着の破れ穴からそれを考え始めるととめどがないんだ。一般教養に追いまくられていた一、二回生の頃は畑違いの"化学"への不安と"社会学"なる冒険にうかうかとその日をうばわれて、学内外の課外活動の数々ばかりが華やかな色どりを添えて肝賢の知識の拾得の方には棚におき忘れて埃をかぶったままになって頂く。そう正直いって遅まきながら"化学"というものを考えはじめたのは三回生になってからって訳だ。その時例の"俺は化学屋"だという感慨が又やって来て、このまま手をつけて良いものやらと一瞬遠慮深くなったものだ。それも半ば強制的に限られた期間に与えられた仕事をするオートメ工場並みの講座廻りをやっている内に段々と一つ何かやってこましたろうとの意義込みばかりが熱して来てしきりとやせ腕を鳴らしていたがその実　講座のデーター整理に追いまくられてぶつくさいっていたのが実状だ。でも此には自分としては時間を最大限に有効に使った積りだ。その自負より、何か満ち足りたものが何時か自分が知らない間に活きる時があるんじゃないかと思っているよ。随分徹夜や深夜まで実験を続けた事が今では大した苦痛を伴わずに思い起せる。自分等で重合したビニロン（ポバー

ル）を紡糸機から紡糸浴まで友人と二人工夫して連日終電車まで頑張る事十日余り、終に水に不溶の糸にした時は涙を流さんばかりに喜び合って、記念に少々持ち帰った奴をお前さんにも見せたと思うが。又悪臭ふんぷんとしたビスコースの徹夜の看病に漸く退院間際になって台風に出会わし、慌てて氷で冷やしてやったり、ある室ではあんまり夜遅くまで居るものだからそこの助手殿から「人权を無視する気か」と怒鳴られる一幕もあった。又データー整理に忙殺されて調度期末テストの半ばに整理が終ったなんてやり切れない時もあった。度々の実験の失敗には困口して意気消沈する事もあったが、そんな際にはコンパという特効薬にすくわれたものである。そんなこんなの講座廻りを終って研究室送びとなると又一苦労だ。別にここで一生がどうこうということはないと思って俺は唯研究内容を主体にあっさり決めてしまったが、中には室の雰囲気、教授、友人の顔ぶれ、就職、から室の位置まで担ぎ出して容易に治まらなかった。ひどいのになると唯なんとなくという者までいる仕末だ。俺はこう思った。そんな輩は自分がどんな研究をしてやろうとは及びもつかず、まあ単位だけ貰えればの悲しき方々じゃなかろうかと。実際自分で卒論テーマを決めてそれをやっている連中は幾人いるだろう。教授の御南懐から送んだ者、全く当てがい扶持の者、先輩の引き継ぎとそれは様様だ。でも俺の場合動機も糸口も実に芸弱だ。唯何となくテトロンに魅せられて何となくこの研究でもやろう位でいた訳だ。室に入るなり先生に「一つテトロンの共重合をやらせて下さい」と意気込んで頼んだもののその中身は誠にお粗末であった。だから「近頃誰もやっていないが１つやってみろ」と云われた時は嬉しいような拍子抜けしたような具合であった。でも誰の制約も受けない実験を自分が考えたテーマでやれるという自負だけはしっかし浸みついて、それだけは何か儲けた気がするんだ。明日からどうしようという霧中の迷いが救われるだけでも良かろう。そりゃ、文献にもない事だから随分考え込んでしまって途方に暮れる日もあるが、それを一歩踏み越すと又卒業までの時間では足りない多忙を極める事になる。地図にない道を行く興味って所かもしれない。一ぱしの化学者の積りで気むづかしく器具を使っている自分を思って一人にやりとする時がある。まだ化学の桃源境に迷いこんだ所まではいかぬがその入口でもたっている気分だ。そんな時ほら例の正月に稲荷神社で願かけたのを思い出すじゃないか。今日只今から、一つ女性には関心を持ちません、一つ酒は適量にたしなんでそれに付随する快楽を求めません。一つ賭事は一切此を行ないません、一つ遊興街には妄りと足を踏み入れません、一つ他人には不当な干渉を致しません。まだあったかもしれん

がどうだ。社会に出ればそうそう勝手も云えぬ等々と理屈を付けて楽しんでるんじゃないのか。幸か不幸か小生の方は此を破る好機も到来せぬ次第だが君も切符切りではなあ、せいぜい身体を毀傷せぬ事だ。この正月には会えようが、それまで一まずお別れとしよう。月がやけにいいじゃないか。おやすみ。

夏季実習始末記

3回生 根岸靖雄

それは今年の夏のことであった。地上の水分が全て蒸発しきってしまうのではないかと思われる程暑い一ケ月が俺の前に待ちかまえていた。その生活は午前6時半から始った。毎日毎日の蒸気風呂攻撃は俺の体の水分を2貫も奪い去っていった。もはやビールでは追いつけなかったがしかし俺は頑張った。2単位と金のために、かくて月日は市電の如く過ぎ去ってしまった。さて実習で得たものは染色の知識であるなどといえば誰も本気にしないし、俺も信じないから言わない。自分が実社会というもので dyeing されたといえばまず無難なところだろう。何色に染まったかなどとやぼな質問はせんでくれ、そこで染色の話だが、染色方法には種々あるけれども、その中で最も良く使う芒硝の作用について人から聞いた話を述べさせてもらって拙文を結ぶ。御存知の通り、繊維は水中に於いてはその表面が電気二重層により正か負に荷電した現象を生じる。即ち木綿は負に、ナイロンは正に帯電している。これを今例えば木綿を直接染料で染める場合直接染料は水中で負荷であるからそのままではよく染まらない。そこで芒硝（Na_2SO_4）を入れることにより繊維表面の負荷を Na イオンで弱めかつ又 SO_4 イオンにより染料イオンのイオン化を止め平衡を元に戻し繊維表面に色素を固着させる助けをすることになる。一方逆にナイロン染色に酸性染料でする場合はナイロンは正に帯電しているから芒硝は不要の様であるが、実はそのまま染色すると余りに早く染りすぎてムラ染めとなるのでこの傾向を抑制し均等に染色するために芒硝が用いられているのである。もちろん芒硝に限らず中性塩一般に言いうることなのである。物事に中庸の尊とばれるユエンである（余り関係ない）　未完

なかにわ

夏休み終る

7月10日から2ケ月間に及んだ夏期休暇も終り、各回生とも色さらに黒味を帯びて登場、静かだった我が教室もが然賑やかになった。しかし4回生にあっては休み返上で卒論テーマに取り組んだ人多数。しばらく続いた"休みぼけ"も前期の試験準備で完全にとんだ事でしょう。

内藤先生農学博士に！

林屋研究室の内藤謙一助手は京都大学に提出中の学位論文がこの度パスして、農学博士となられました。論文テーマは「蚕の食性に関与する桑葉中の成分に関する研究」
今後ますます活躍されますことを期待致します。

学外実習 —3回生—

専門課目2単位の学外実習が夏休み中3週間ばかり官庁、大学、民間会社などで3回生を対象に行なわれた。幸い受講者全員事故なく無事にしかも優秀なる成績を収めたようである。ここ当分3回生の間では実習の話が巾をきかせるだろう。

秋

時将に"灯下親しむべき冷涼の秋"はこの試験期だけ、あとは天高く馬肥ゆる秋、大いに身体を鍛えるべくスポーツを愛そう、3回生は最近一人当り20円出し合ってソフトボールとバットを買い暇をみつけては研究に余念がない。ツマッタ当リデ全クツマランナア------。一度C科任意グループに依るソフトボール大会でもしようか？。

コイ

休み中しばらく会えしまへなんだコイさんにおおて、にわかにおおきゆうならはったんでびつくりしてますねん。
でも誘惑されたのか勘定が合わん様に思いますがどないなもんでしょう？
ところで中庭の桜の木に最近毛虫が繁殖し二三の木は殆んど葉を喰い荒されて哀れな様相を呈している。昼休み休憩時間など毛虫取りをして下さい、池のコイはこの毛虫をとってもよくたべますよ。

矛盾

4回生 寺田英一

先日、久しぶりに講義に出ると、机の上に"矛盾"と彫ってある。余程深刻に思いつめたものか、魂の入ったその彫りっぷりに少なからず感動した。

矛盾という言葉は、中国の故事よりその源を発していることは誰でも承知している所である。今回はこの矛盾について、心のおもむくままに書いてみようと思う。

時は西暦800年、唐の都は洛陽、その東の城門の辺りで一人の男が大風呂敷をひろげている。何やら売っているらしい。日は西に傾いたとはいうものの、山一つない広漠たる平野を通してくる熱風とぎらぎらと黄土色に輝く西日は、ようしゃなく男の顔に注ぎかかる。未だ昼の暑さがぬけ切らない城下には人っ子一人通らない。じりじりと照りつける西日をも意に介せぬのか相変らずどっしりと尻を落ち付けている。唯空中に舞っているトビの鳴き声だけが、生を象徴しているかのようである。------

やがて半刻も経ったであろうか、一丁程先の土壁に沿って、二人の男が何やら話しながら歩いて来た。あたりはもう薄っすらと黄昏れて二人の顔も判別し難いのであるが、その話し声の様子から、一方は商人で他方は若い役人か或いはいわゆる秀才の大学生のように思われた。

「あんさんは今度の科挙の試験にパスされたそうですな、よろしおしたな。あんさんは御自分の実力だけで入らはったんやから偉いものですわ、その点わてらの息子は、わてがついているからいいようなものの------へへへこんなことは言わぬが花ですな。ところであんさんの落付く先は？」

「ハア、私しは役所に勤めることになりました。母も喜こんでくれています。何しろ此の頃の官僚の腐敗には目に余るものがあります。だいたいやることが理屈に合っていませんよ」と若い男の声には一段と力が入って来た。

「蒙古との安全保障条約の問題にしてもそうですよ、だいたいあんな帝国主義の国と交るなんて、将来が思いやられますよ。ワタシは絶対反対ですね」感心したように商人風の男はうなづいて見せた。

「ところであんさんも安保斗争では大いに活躍しはったんでっしゃろな、わてはあんさんにそんな純粋な気持をいつまでも持っていてもらいたいもの

ですわ」

「----------」若者は黙ってしまった。商人風の男もそれ以上何も云わなかった。彼には解っていたのである。何やかやを批判はして見ても、何らそれを実行に移すという情熱もなく、ただ大学に居るということに満足している連中のことを ------- 二人は黙ったまま東の城門まで歩いて来た。

例の男は相変らずどっしりと尻を落ち付けていたが、二人の客が歩いて来るのを見ると、いつもの調子でやり始めた。

「さあさあ、お二人さん、この矛を見てくれよ。都中探し廻ったって、そこいらここいらにある代物とも訳が違うんだ。都中のどんな頑丈な盾だって貫き通せるんだよ。切れ味だけと違うんだぜ。！この刄の光の方を見てくれよ」 と男はホコをかざして見せた。

日は既に沈んで、昼間太陽の光で影が薄かった月も、今はその美しい姿を中空に現わし、さん然と輝いていた。辺り一帯は青白い月の光で、先程よりも明かるさが増したようであった。唯静寂そのものの中で三人のぽつんとした存在が妙にその雰囲気にとけ込んでいた。

男のかざす鋭い刄先がさんさんと降りそそぐ月光に、その最大の美しさを誇るかのように妖しく輝いていた。二人は同時に「ホウ---- 」と嘆息を漏らした。月光に冴え冴えと輝く刄は、いかにもどんな堅固な盾でも貫き通すぞという意欲に燃えているようであった。二人の半ば魅せられた、燃えるようなまざしを見て男はニヤッと笑ったようであった。

「俺に譲ってくれ！」と若者がせき込んで言った。

「銀貨一枚ではどうだ」

「ご冗談でしょう、！なにしろあちらこちらにある代物とは違うんですよ」

「それじゃ二枚！」

「だめだね」と男は落付いて言った。

「それじゃ----- 」と若者はふところに手を入れながら、ためらいがちに口を開こうとした。

「よし、銀貨五枚で買った」とその時連れの男がいい切った。若者は急に横っ面をしたたか打たれたような屈辱感におそわれた。がでっぷり太った男の顔を見たとたん「目には軽蔑の色が浮んでいた。------こいつは金だけが取り柄なんだ。俺のように教養もないし ------

「さすがは旦那ですねえ、5枚で売りましょう。ついでにこの看をちょっと見て下さいよ」と男はさびた看を取り出した。月は次第に高く昇り、雲一つない中空に輝いていた。男はまた前と同じ調子でやり出した。

「さあさあお二人さん、この看を見てくれよ。都中探し廻ったって、そこいらここいらにある代物とは訳が違うんだ。都中のどんな鋭い矛だってこの看は貫き通せないよ。それに唯頑丈なだけじゃないんだよ。このつらの光り方を見てくれよ」と男は誇らしげに月の光にかざして見せた。

「ホウ……」という嘆息が二つの口から同時に漏れた。

「俺に譲ってくれ！」と商人風の男がせき込んで言った。

「銀貨五枚でどうや」

「ご冗談でしょう、何しろあちらこちらにある代物とは訳が違うんだよ」

「そんならもう一枚出しまっさ」

「だめだね」と男は落ちついて言った。「あと一枚。七枚ならお譲りします」

「よっしゃ、七枚で買った」と客はふところから銀貨を取り出した。若者は先程からこのやり取りを見ていて急に笑い出した。

「ねえあんた。この矛は都中のどんな堅い看でも貫き通せるんでしたね。ところどころでこの盾は都中のどんな鋭い矛でも防ぐことが出来るとおっしゃいましたね。それじゃこの矛でこの盾を攻撃したら一体どういうことになるんでしょうかね。馬鹿々々しいにも程がある！　こんなものに大金を出す奴の気が知れないよ」と半ば悪口を言いながら城門の陰に去って行った。

「なる程、あいつの言う通りだな」と商人風の男は感心したようにつぶやいた。

「いや、わたしは何もべつに不合理なことは言ってはいませんぜ、だんな」と男は弁解した。「わたしはこの盾は都中のどんな鋭い矛だって貫き通せいと確かに言いました、またこの矛は都中のどんな頑丈な盾だって貫き通すことが出来るんだとも言いました。しかしよく考えて下さいよ。この矛がこの都で作られたものだとは言っていませんぜ。実は……」と男はここで少し調子を落した。「実はこれは立派な矛を作ることで有名な浔陽の都で作られたものなんです。あの浔陽の矛がこの浔陽の盾を貫いても何ら不思議はないですよ」

「なる程」と客は答えた。「二人の理屈は最もらしい。が何となくしっくりしないな。いづれにしてもわしは矛が盾を貫き通すのどうのって訳で、買ったのではないんだからな。何しろこれは極出し物だよ。大体五百年は前の代物だな。俺の目に狂いはないんだから」と商人風の男は一人ごとを言いながら立去って行った。月は煌々高く昇って、各々家路を急ぐ三人の満足した顔を照らし出していた。

話はこれで終りである。まあ何とくだらん話を書いたものだなあと笑う人

が大部分であろうと思うが、何となく書きたくなったので拙文をものした次第である。時代考証もデタラメである。読んで訳が分らなかったら、文章が矛盾しているのか、筆者が矛盾しているものと思って下さってさし支えない。

生れて以来二十余年、我々は色々な矛盾に遭遇して来た。ある時は矛盾を打破し、それに打ち勝ち、ある時はそれから逃避し、またある時には打ち負かされた。とりわけ高校時代から大学時代にかけては、色々な矛盾が目についてやり切れないことがよくある。しかしそれも年を取るにつれ、成長するにつれて矛盾を矛盾と感じなくなり、或いは矛盾に目を閉じて、それから逃避するようになる。

一回生の時には誰れしも感じるのは大学全体に漂う無気力感である。このことについては一回生がよく *chain* に書いている通りである。それでは具体的にどう無気力であるのかと聞かれても、説明し難いが直観的にそのように感じるのである。もちろんこの無気力が理想的な大学或いは学生の在り方と矛盾しているものであることは万人が認める所である。そして大いに憤りを感じ、ある人は自治会活動に、ある人はクラブ活動その他に専念してその打開策を講じる。しかし二回、三回と学年が進むにつれて、一回生の時に持っていた若々しい気力（特に学内に漂う無力感を打破しようとする気力）も失い、ただのっぺらぼうに単位を取り、のっぺらぼうに卒業する結果と相なる。*chain* に原稿を書くことすら憶くうになってくる。その証拠にいつものことながら四回生の投稿が何と少いことか。何か言いたいことはあるはずである。

学生の中には何か目的をもって意欲的に活動している人もあるし、ただ何となく大学に居るという人もある。大部分は後者ではなかろうか。こういった人間の集りである大学というものが醸し出す雰囲気が何となく無気力であるのは当然であるとも考えられる。このような状態が毎年くり返されている所を見ると、これが本来の大学というものの姿ではなかろうか、という気がしてくる。とすると我々が矛盾と思っているものも案外矛盾でないのかも知れない。あらゆる現象に於て矛盾とは見解の相違ではなかろうか。そこで古代中国の故事"矛盾"を適当にアレンジして"つまらない話"を書いてみたのである。

放　言

3回生 根岸 靖雄

諸君は"地球を今球形とみなしてその円周上に糸を張りしかる後にその糸を1mだか増加し再び均等に地球を糸でとり囲んだ場合糸は地上から何mm上昇するか"と問われてすぐ答えれるだろうか、何と失礼なことをと申される方はまず答えていただきたい。多くの人は1cm以下の答えを直視的に感じとられたのではなかろうか。では次に半径5cmの球で同様のことを考えたら答はおそらく50cm内外の答を出されるのではなかろうか。もちろん、計算すれば何でもない問題であるが人間の直観というものは恐ろしいものであり!! 客観性のないことをしで勝ちである。円の半径をrmとすれば円周は$2\pi r$でありそれに1m加えれば$(2\pi r+1)$でありこれから半径を求めるには2πで割ればよい。すると答はもとの半径に関係なく$1/2\pi$mとなる。この種の誤った直観的判断が世間ではえてしてよくおこなわれていると思う。それは大は人類の生命を脅す事柄から小は夫婦げんかまで種々雑多であるが、少なくとも自分の利害関係に関与する事については言いたい事をいわなくては損である。誤りを誤りと知ろうともせず、あたかもこれが神であるかの如く振舞う連中が巷にはうようよしていると申してよい。その才たるものがケネディでありフルシチョフであり右翼であり全学連であり我々の自治会の委員連中でもある。我々はマルクスが愛妻家であろうとなかろうと知ったことではないしましてはそ奴の書物を知らねばならぬ義務もない。しかるに学生のいわゆる英雄主義者達はそれをカサにしていいたいことをヘイヘイとぬかしよる。別にうるさくて夜も寝られんといった音話しを例に出す気はないが奴らの巻舌えを食うのはまっぴらご免こうむりたい。俺が思うにマルクスがどうのこうのという連中が何故学生時代だけデモをしよるか、社会人になったら何故しよらんのかということは結局奴らの英雄思想に他ならないと思う。学生時代なら押えるべき上役がいないからなんだ。そこでそ奴らは自分より英雄を良からぬ存在と思う訳である。そこでその英雄の足を引っぱるべく涙ぐましい努力をするわけだ。それが自治会委員長の首相悪人説の根幹ではなかろうか。英雄になりたければならしてやるではないか。別に太平洋をヨットで渡らなくとも、もうこのへんで英雄よひっこんでくれ。

（文中の失礼はこらえてくれ）

第4回

思想、随想、幻想

東北の旅（上）　　3回生 金田洋二

連日の雨の為か心の迷いかわからないが、人はふと旅に出たくなるものだ。そこには何の理由もなく、何の用意もない。漂泊の思いやまず旅に生き、旅に死んだ芭蕉だってそうだったろう。都会の空気はくすぶり、倦怠、嫌気 etc にうまっている。皮肉と毒舌でもとばさなければ腹の虫が治まる所がなく、とび出すであろう。象牙の塔ではなく、すでに空びんの塔ぐらいに地におちた所をとび出して、より現実をそして理想を追う。現実逃避ではなく再突入である。「月日は百代の過客にして‥‥」のような名文はとても書けないにしても、フイクションとファンタジーに少々下手なレトリックを交えて、この直線と直観と正直のこの地方の事を書いて見たい。そして、森を見るよりも木を見ることを主眼にしたい。

松島　―― 禅 ――

松島は下らない所であるというのが一般の評判のようなので、計画には入れなかったが、仙台でたまたま石巻にいく電車があったので、それに乗ってしまった。窓の外をながめていて、ふと自分が旅をしているのではなくて、今学校から帰っているのだという錯覚におそわれた。初めから行くつもりのなかった所だからどこで降りてよいかわからないし、松島海岸だったらいいだろうと思ったのでそこでおり、宿をとった。瑞巨と下駄という極めて日本的スタイルで瑞巨寺・観瀾亭などを訪れた。僕は昔から神社は好かんのだが、寺、特に古寺は何となく好きなのである。この寺の石畳と直線的な杉は大層気に入り、十年位前に訪れた高野山の奥の院への道を思い出した。そこに共通するものは、静けさの中の無である。それは禅なのであろうか。この寺の洞穴の幾百の石仏、静かに糸の様な雨が降り、緑の一層濃くなった杉、遠くに雨にけぶってぼんやり見える松島、それは一種の幻想的世界である。ここでは変にヒネクレなくともよい。天邪鬼にならずともよい。ただ美しいと言葉に出なくとも思えばよいし、又素直に思う事が出来る。

雨も止んだ夕暮時、雄島に向う。岩をくりぬいた道は下駄を心地よく響かせ、その両側に彫られた仏像が何をか語り教えるであろう。ポツリポツリと木の葉にたまった雨水は落ち、凪いだ海はあくまでも静かで、そこに自分の心だけがあり、誰もいないようであった。それは快さでなく、孤独感でなく

ただ無感動、それも別の石仏の無感覚に通じていたであろうか。

平泉の地 ―― いぶし銀 ――

"夏草や兵(つわもの)どもが夢の跡"の句碑の残る毛越寺。高校生位の女の人が、英語の暗唱のような調子で説明してくれる。そこには草が茂り、確かに夢の跡に相異ない。もはや栄華を極めた昔を偲ぶだけである。礎石が世の無常を示している。この無常となげき、いたずらに浄土を求めたのが藤原氏ではなかったか。管絃の音と美しい舟を浮べたであろうこの池には、今や大小の石がころがっているにすぎない。浮草が池をおおい自然の勝利を示そうとする。

定の方向を変えて中尊寺にゆく。月見坂を登りつつ遠く北上川を見る。又雨が降って来たようだ。ゆっくりと坂を登り、金色堂に至る。

五月雨を降り残してや光堂

まさにその感がある。途中で中年すぎの団体にぶつかり一緒に説明を聞く。人々はその美しさよりも、豪華さにため息をもらす。そしてじやらじやらとさい銭を投げるのである。経堂を至て讃衡蔵に入る。その中には藤原三代の宝物や棺が収められている。その中に靠がしめてあって、秘仏と称する一字金輪座像があった。別に僕はそうして秘密を守ろうとする事に何う不快感を覚えなかった。しかし二百円を払い特別会員と称する者になると見せると云うのだから、腹が立ったというよりおかしくなって来た。二百円払ってもよいと思ったけれど、バカバカしくなってさっさとそこを出て坂を下っていった。それは、遠くインド洋から貝をとりよせ、金銀を豊富に使い、幾多の年月を費して築き上げた平安の文化とは似ても似つかぬけちくさいものであった。北上川は昔と位置こそ変ったが、今なおゆっくりと流れている。しかし平泉はすでに奥州の京ではなく、単なる田舎町にすぎない。藤原氏の求めた浄土も又、無常の中に消えていったのであろうか。それとも浄土とはこのようなものなのか。さらにそれともこのような事に腹を立てる事自体、野暮な事なのだろうか。それでもなお、年々"ザルツブルグの小枝"と化す京都にくらべれば"いぶし銀"の生命を保っていると云い得るのだろうか。

厳美渓と猊鼻渓 ―― 渓流と岩と ――

朝の間に厳美渓を訪れた。ごつごつした岩の間を清流が流れている。ただそれだけである。ベンチに座って流れをじっと見つめていた。みやげ物屋に行ったらその老主人は徳島の人だという。何故僕にその事を話したのか、何故こんな遠くへやって来たのか、知るよしもなかった。バスに乗って再び一

ノ関に引き返し、大船渡線に乗り、陸中松川より猊鼻渓口に至る。余り訪れる人とてない舟着場で人が集るのを待った。浅いこの砂鉄川は水が清く、太公望が糸を垂れて、船頭のガラガラ声とさおが川底をつく音が両岸にせまった岩壁に反響し、心地よい川風を顔にうけて、ある静けさを感じていた。それは無感動ではなく、血あり肉ありの暖かさがあった。それは数十米の岩壁に映えるもみじの新緑のせいであったのか、自分の感情の為なのか、交通が不便な為余り訪れる人とてないこの地に、このようなものがあるのは有難い事である。民謡を歌う船頭のガラガラ声は、まるでステレオ演奏のような効果を示し、例の観光バスのガイドの声とはちがった魅力をもっていた。素朴の魅力というものか。ふと杜甫の絶句が思い出される。

「江碧島逾白、山青花 ------ --」

舟をおり町へ出て驚いた事には、土産物屋らしきものは一軒もない事だった。おそらくこの町はこの渓の観光などあてにしていないようだ。近くには大きなセメント工場があるし、その辺が町の財源のようだ。たいした観光資源もないのに、観光々々と叫ぶ気狂共はこの町を治めていないらしい。

釜石から浄土ケ浜へ ——— カツギ屋と浄土 ———

わざわざ釜石経由で宮古に向う。陸橋をつつ走って釜石行に乗る。汽車に乗って先ず驚かされたのは、中がカツギ屋で一杯であった事だ。それも大抵は女の人であり、二十キロは越えようという荷物を軽々とかつぐ。そこらのワンゲルの比ではない。しかも相当年寄りも中にはいる。ふと彼等を見ているといわゆる悲劇的でないのが不思議だ。彼等にとって働く事は自明であり、常識でありうる。世の文化人達はその封建制を論じ、婦人の開放を叫ぶだろうが、それが果して彼等の幸福をもたらすであろうか。又、確かに彼等は行儀が悪い。しかしその行動は決して不快を感じさせないのも不思議な事である。例の上品ぶった都会人の旅の恥はかき捨て根性はこの全旅行を通じていやという程見せつけられはしたが、この地方の人々からは何等感じはしなかった。ほのぼのとしたような気持で釜石を過ぎ、宮古から浄土ケ浜へ向った。

この澄んだ海水、真白い岩、それは浄土の名にふさわしかった。まだ水が冷たいこの地では、海水浴客もなく、少々静かすぎる位だった。舟にのって遠くローソク岩、それに最も期待した潮吹き岩がある。残念ながら波が静かすぎて潮を吹いてくれなかった。波が高いと数十米は吹き上げるというのだから、誠に興味深かったのだが。旅館で又例によって下駄をはき松林の丘から下方に拡がる浄土ケ浜をながめた。年老いた漁師が魚を釣って上ってきた。

ので見せてもらいながら、この水ならこの魚がとれて当然のような気がする程美しいものだと思った。遠く松林の間から浄土ケ浜の見える宿で、夏だというのにドテラを着、火鉢に火を入れていた。夜は全く静かで波の音も聞えなかった。しかし遠くの室で三味線の音が聞え、恐らく芸者遊びでもしているのであろう。この浄土のような土地に何故都会のくだらなさを持込むのであろうか、腹を立てようにも疲れが出てねてしまった。

宮古から竜泉洞へ

宮古でうっかり小本行きのバスをのがしてしまったので、宮古市内をぶらぶらしたが、この地方小都市もその俗悪さにおいて大都市と変りがない。特にこのような町でいつも気がつくのは○○銀座という通りと、市庁舎の立派なことである。それは劣等感と物まね主義のある一つの例にすぎない。しかしこの地の人にその事を云っても仕方がなかろう。それは又日本の特徴でもあるからだ。

小本線という極めて典型的な地方線で、前に座っていた四十位の人と仲よくなったのだが、何を思ったのかその人、急にエチケットの話を持ち出し、僕はもっぱら聞き手に廻っていた。それは非常にちょっとした事でどうという事もないが、何かうれしくなったのは妙であった。その後竜泉洞へ行くバスの中でキャンピング・グループに出合い、その傍若無人のエチケットのなさに全くあきれてしまった。僕自身エチケットがどうこういう柄ではないがその僕があきれるのだから。少々気分を悪くして竜泉洞に入った。前に秋芳洞を訪れたが、大きさからいえばやや小さいが、その素朴な俗化されない所が非常に気に入った。一人で誰もいない洞穴に入っていくのは少年時代の冒険心を思い出すようで楽しい。洞穴学という学問は「スペレオロジー」と云うんだそうだが、変形と流動を扱う「レオロジー」の名にふさわしい。この洞の水はすばらしく透明度がよく（何でも世界一という）これがまさにH_2Oであると思った位である。十米位下に竜のような岩が見られ、この洞の名の故であるらしい。バスが余りないので待つ間にこの渓流を逆登ってみた。水は美しい人はいないし絶好のキャンプ地である。そういえば秋芳洞はマイクあり、エレベーターあり、土産物屋がズラリと並んでつまらない所だがこの地はまさに東北的であった。

岩泉町で夜は牛乳風呂（これは決して全てが牛乳である訳ではない。牛乳の数％溶液である）に入り少々ミルクくさくなった体で町を歩いたが何もなかった。もつとも何も期待したわけではなかったが、　ここも前の猥雑感の

ように観光をあてこんでいるわけではなかった。牛乳風呂でもわかるように畜産業・林業が主な産業のようであった。

八戸から下北へ

岩泉の宿で旅行案内を読んでいると恐山というのが見つかった。面白そうなので十和田湖に行くつもりだったが、たちまち予定変更、下北に向う事にした。一日に二回しかないバスに乗り、日本一の鍾乳洞のある安家をすぎ、久慈に向う。途中安家で下りようかと大いに迷ったが、向も用意がないのであきらめ、又いつの日か訪れたいと思った。この辺は近くに平庭高原や海岸線の美しさにめぐまれた、すばらしい所である。八戸線に乗り北上し蕨という所で下りる。そこには蕪島という海猫の繁殖地があり、それのずっと南が種差海岸となっている。島には20分程歩けばつく。小猫が何千と群がり、母乳を求めているようだった。しかし鳥は美しく、人を恐れない、肩にとまる程ではないが、近づいてカメラを向ける事は可能である。島は鳥の巣で決して美しくないが、町の近くでこのように天然の鳥が多くいるのを見れる地は少ないと思われる。再び鈍行列車に乗り野辺地に至る。ここで下北について駅の人の話を聞いたが、時間が遅く恐山へも薬研（やげん）へも行けないと云われ、下風呂に行く事をすすめられ、少々疲れていたし、仕方なくその言葉に従う事になった。大畑よりバスで一時間位で、下風呂に着く。恐らく温泉が出なかったら単なる漁村に過ぎなかったろう。この地を更に行けば大間峠に至り、更に佐井村から仏ケ浦に出るコースもあるのだが、もうそう金はあるわけでなし、下風呂で一泊し翌日恐山に向う事にした。この辺は宿の安いのが又一つの魅力である。硫黄の臭いがプンプンする共同風呂に入り、（この地では内湯のある宿はほとんどない。）海辺らしい料理を食べる。僕は元来磯の香りは好きじゃないが、この日本料理独得の香りを食べるという事が非常に好きである。それは一種の自己欺瞞であると同時に、季節、風土に敏感な日本人の心情の表われといえよう。そこにはビタミンもカロリーも存在しないが、いわゆる文化的という自己欺瞞と何の違いがあるのだろうか。とにかくこの人の少ない文化的とはいえない地で文化を考える事は意義のある事であり、遠くイカ取りの灯をながめつつ茶をのんでいる間に夜は更けていった。

編集後記

13号が発行される頃は前期試験もたけなわといった頃だと思いますが、今年度になって三冊目、又かという感じのしないでもないでしょう。試験が終ると本格的な秋が待ち、今年は学園祭も繊維と工芸合同で行なうようですが、何とかして皆んなで成功させたいものです。
先ず始めに前号の住所録、印刷屋の都合で校正も引受けて呉れるということだったので、中に二三不手際のあったことを御断りしておきます。次々の発行して行くについても問題はないわけではないのです。駆け回って集めた原稿を編集し校正し、そして発行、おしつけるように買わせる。こんな事をするのが面白いか面白くないか、そのような問に答えなくてもよいと思いますが"大義名分"が泣きはしないかなどと言われるとちょっぴり悲しくなったりする。
一体役に立っているかいないか、個々の意見も時々に耳に入るけれど、負担に思っている人が少しでもいるのは本当に残念なことだ。
情性で次々と発行していくのかなどといわれては全く片腹の痛い事だ。
第三者の立場から色々と警告はしやすいけれど、いざやってみると本当に仲々こちらの思うように行かないということがじれったくなる。
皆んなが我々の意識を持って戴ければと思うのですが。
我々人間個々独立するが、独立するが協力する。皆んながそんな気持になってくれたら。

いかなる時でも自分は思う。
　　もう一歩
今が実に大事な時だ、
　　もう一歩。

我々繊維化学科生が共通の話い合いの場を持ちお互いをよりよく理解し繊維化学科の発展の為個々のエネルギーを結集すべききっかけをつくるために

Chain No.13

発行日　昭和37年10月10日

発行者　京都工芸繊維大学繊維大学

印　刷　北斗プリント社　TEL ⑦0231

編　集　繊維化学科 Chain 編集部

編集代表　金井政洋